



日々、始端。

---

「あなたの名前を教えてね？」

私のゲーム機を起動して画面を見るとこのような文字が書いてある。何とも幼い女の子の声がスピーカーから聞こえてくる。あれ、昨日入れておいたゲームは戦国シュミレーションだったような……。まあ最初にプレイヤーの名前を入力してゲームスタートなのだろう、この幼い声の女の子は姫か何かなのだろう。そんなことを私は思いながら「みなみ」と自分の名前を入力する。私の名前は丹下みなみだからだ。

「それじゃ、ゲームスタートだよ、お兄ちゃん！」

スピーカーからは確かに戦国シュミレーションではない声が聞こえた。お兄ちゃん？みなみ殿でもなくお兄ちゃん？私は画面をふと一度見る。そこにはさっきまでスピーカーから声を出していた幼い女の子が現れていた。

「お兄ちゃん、何をしているのっ……」

「すみませんっ、先輩！ゲーム入れっぱなしでしたっ！」

その後輩、幸村正宗の声によって私の集中は途切れた。そしてこのゲームの内容に気づいた。そのゲームは私の戦国シュミレーションではなく後輩のエロゲだった。

「遅いっ！そしてエロゲを神聖なる部室に置くなっ」

私はコントローラーを机に置き立って後ろを向き、そう幸村に叫ぶ。そして幸村は自分のバッグを私の座っていたソファに置く。

ここは私立常套高校文化部の部室。ちなみにこの高校は吹奏楽部も美術部もなくそのような文化系の部活はまとめられ、一つの部活“文化部”となっている。

私は部員その一、二年八組在籍丹下みなみ。親はどちらもサラリーマンという平凡家庭。中学時代は吹奏楽部に在籍していた、ゲームオタクである。

そしてこの後輩、部員その二、一年三組在籍幸村正宗。サッカー・野球といったスポーツが大好きなくせに運動音痴で中学時代は帰宅部だった、アニメオタク。そしてすごくエロい。

他にも五人ほど部員が入るこの部活は運動部26のこの学校において特異の目で見られる部活なのだ。

「エロゲじゃないです、義理の妹と恋愛をして、「親が離婚したから結婚しようぜ」「分かったよ、お兄ちゃん」という展開になって、子供が生まれるまでの過程をプレイするゲームですよ」

「結局エロゲじゃないか！」

私はすかさずゲーム機に入ってたディスクに書かれているタイトルを見る。そこにはテレビじゃ放送されないような哀れな姿になったさっき幼い声を出していた女の子が書かれていた。タイトルもテレビだったら絶対放送禁止用語になるようなものが書いてあった。

「没収！」

「すみませんでした、返してください！」

私はゲームのディスクを取り、部室で静かに読書をしていた一人の先輩に渡した。

この人は部員その三、三年七組在籍天草ネネ。大の本好きで一日に本を三冊は読む速読家でこ

の常套高校の生徒会長を勤めている。云わずと知れた文学オタクだ。

先輩は何だか難しそうな本を閉じ私の持っていた幸村のエロゲを受け取った。そして口を開いた。

「話は聞いていましたよ、丹下さん、幸村くん。この幸村君のエロゲ・・・あああのライトノベルのあの子のエロゲですね。私もこの本好きなんですけど幸村くん誰が好きですか？」

「ああ、それなら勿論・・・」

「だからと言って没収を逃れる訳ではありませんよ。第一私は原作が好きなだけで二次創作物は嫌いですから。このエロゲは懲罰委員会で査問に掛けさせていただきます」

「・・・・・・・・」

幸村は先輩にそう言われるとすぐに項垂れ、後ろを向いて扉のほうを目指していった。ソファに置いてあったバッグを担いで扉へと向かった。

「一旦、ゲーム買いに行ってきます」

「何のゲームだ？」

「勿論今とられたエロゲの完全版ですよ！」

そう言って後ろを向こうとした幸村の顔は万年の笑みとしか言いようがなかった。私は項垂れて自分の今日やろうとしていた戦国シュミレーションのディスクを入れた。溜息をつきながらゲームのスイッチを押す。

「懲りないなあ、あいつも」

懲罰委員会常連のエロゲマスター幸村正宗に私はそう言った。

まあ、あいつはエロゲを買いに行っただけ聞いていないのだが。

春休みの一こま。

---

「何で私達が休日だったのに部室で駄弁んなきゃいけないんですか、先輩？」

「なんかこのアンソロジーを書こうって提案した執筆者が厨二病小説書けないからって、私達に某生徒会のラノベもといアニメのように駄弁らすのを仕向けたらしいわよ、みなみちゃん」

「嘘だ！」

「残念ながら嘘じゃないのよ、幸村くん。あとひぐらしネタは古いと思うわよ？」

「まあそれはさておき、何をします先輩？」

「そうね、いきなり作者に駄弁ろって命令されてもねえ」

「そうっすよ、早く家帰って俺妹ポータブルやりたいんですけど」

「私はあやせ派よ、で何をしたい？」

「さりげなくオタ談義やめて下さい」

「異議ありッス！俺は黒猫派ッス！」

「あら、あなたは沙織派じゃなかった？」

「花澤香菜さんの声最高っすよね？」

「花澤さんというと思うに化物語の撫子は外せないのだけれど」

「まさか今日そういう談義で終わらす気ですか？」

「だって私は生徒会長よ？ロリでも下がやけに開放的でも無いけれど」

「その例え、葵さんと氏家さんにとっちめられますよ？」

「氏家さんは俺の心の師匠です！」

「だと思った」

「いいじゃない、極上生徒会役員共の一存をヲタのしみで」

「プラスしすぎです！」

「じゃあ形式に乗っ取るわね、常套高校生徒会会則その一！」

「...太鼓と笛用意します？」

「さぁ始めるザマスよ」

「らき☆すたですか！」

「いや生徒会の一存だけれど」

「同じ星なら、綺羅星！」

「綺羅星！」

「本当アンタらフリーっすね...」

「ノープラン！」

「その通りですけど！」

「今オタクを舐めてると後で痛い目に遭いますよ！」

「言えないよ！私ゲームオタクだもん！」

「よく言ったわね」

「ノンジャンルのノープランオタクに言われたくないです」

「何でもじゃないわよ、好きなものだけ」

「今のフレーズ何処かで聞いたような」

「そんなことは気にしないでみなにちゃん」

「嚙んだ！」

「失礼、嚙みまみた」

「わざとじゃない！」

「神はいた」

「何処に！」

「邪魅もいた」

「何処の百鬼夜行ですか！」

「そこまで言えるあなたはアニメオタクね」

「嵌められた！」

「すいません、俺も全部のネタ知ってました」

「いいじゃないリアル生徒会のヲタのしみよ」

「じゃあ否定します！」

「ちえりお！」

「うおっ！」

「いきなり殴るとか鬼ですか！」

「いえ、魔装少女です」

「あ、俺ゾンビッス」

「乗らなくていいのよ幸村」

「そうっすか？」

「この部室においてネタに乗らないのは許さないのよ！」

「と、会長は無い胸を張って何かの受け売りを叫んでいた、ですか？」

「何ですかそれ」

「常套高校生徒会会則その一よ」

「今頃ですか！」

「まあとにかくネタには乗りましょう」

「じゃ会長！」

「何？」

「部費でカスタネットをお願いします！」

「承認！...ぺったんこ...」

「幸村、そういうネタはコンプレックスを持っている人にやっては行けないと思うのだが」

「因みにカスタネットならその棚にあるわ」

「復活早っ！」

「これでもバスト88、カップはGよ」

「それネタですよ」

「本当はCよ」

「私と同じですね」  
「揉まして下さい！」  
「神聖なる部室ではいけません！」  
「部室以外でもダメでしょ」  
「じゃあ今いいわ」  
「ダメ！」  
「いいわよ私幸村くんと付き合ってるんだもの」  
「...それネタ？」  
「「いえ事実です」」  
「...おめでとう」  
「テンション低くなりすぎです！」  
「私帰る」  
「あら本当に帰っちゃったわ、でまーちゃん」  
「何？」  
「揉む？」  
「ああ、いい？」  
「うん、あっああ、う」  
「止めろ！」  
「あ、戻ってきた」  
「まだこれからだったのに」  
「どこまでやるつもりだ幸村改めまーちゃん！」  
「妊娠！」  
「してるわよ」  
「...」  
「...本当？」  
「二ヶ月よ」  
「いつの時の子だ！」  
「あの時、いやあの、いやあれかしら」  
「よく覚えてるな淫乱共め！」  
「まあ妊娠は嘘ね」  
「性交は！」  
「...」  
「本当か！」  
「嘘だ！」  
「今はうみねこかと、で本当ですか」  
「手頃な女を目指している」  
「まあ全部嘘っすよ先輩」  
「期待したようなことは無いわ」

「良かった」

「あれ先輩のフラグは俺立てていませんが」

「立てなくていい！」

「でも先輩のドッペルが昨日俺を求めてきましたよね！」

「犯罪だよ！フラクタルシステム悪用してる！」

「あんなに激しかったのに」

「あんたは乗るな！」

「でもさっき言ったでしょう？ネタには乗りなさいって」

「校則にはありませんそんなの」

「あら私が正義よ」

「このお方が正義っす！」

「それが天草クオリティー」

「あんたはただの生徒会長だ！」

「じゃあ会長命令」

「今は休日です、第一部活！」

「でもこの大嘘付きの手にかかれば」

「それでは皆さんご唱和下さい！」

「「It's all fiction！」」

「騒ぐなアンタら！」

「何言ってるのみなみちゃん改め喜界島ちゃん」

「私は峯岸です！」

「とやっとこれで第一話未読者向けに自己紹介終わったわ」

「それ意図的にですか！」

「第一作者が俺たちに投げてきたんですから何とも言えないんですけどね」

「じゃあ作者には第一話SF版を書いてもらおうかしら」

「嘘つき！」

「でも載せるでしょ私達がこれだけ騒げば」

「騒いでる自覚あったんだ…」

「無きゃ騒がん！」

「何か勇ましいな」

「てか書くこと無いならアンソロジーを提案するなっの」

「根本的否定ですか！」

「第一作者迷走してるのよ、どうしたらフラクタルから東のエデンを経て私達になるのよ」

「ブログでも迷走っぷり出てますしね」

「結論私達に日常系やらすのよ、セカイ系大好き人間が」

「まあ否定できませんよね」

「みなみちゃんは作者の何！萌えキャラ？袖の下貰ってるの？」

「萌えキャラも袖の下も否定します！」

「でもそんな作者が第一期ラスト私達って何か不憫」

「切実だ！」

「でも何か第一期このアンソロジーでは続けるらしいっすよ」

「何の情報！」

「Twitterですなう」

「なうはいらんなうは」

「だからこんなに私達に暴走させてるのよ」

「キャラ小説なんてそんなものです」

「なら私達三人でCDでも出しましょうか」

「バンド名は放課後ラバータイム」

「パクリってすぐわかりますね！」

「私の銃はホッチキス！」

「恋じゃないんですか！」

「知らないの？ホッチキス機関銃」

「「知らねえよ！」」

「で後輩加入よ」

「知り合いにいますよ病弱の妹さん」

「それザ萌えキャラね」

「でも現実にいるんだから、否定できませんよね」

「可哀想だその子」

「でも柔道選手なんです」

「意外な現実キタ！」

「でも声優目指すとかで」

「オタクかその子」

「薄桜鬼ファンです」

「「あっ、ああ」」

「まさか先輩方も」

「別に斎藤様のことなんて」

「そうよ藤堂様のことなんて」

「「全然何とも思っていないんだからね！」」

「世にも恐ろしいものみた感じがします」

「だって好きだからしょうがないじゃない！」

「ゲームオタクには色々なジャンルをやる権利がある！」

「男としてやったら負けだと思います」

「「このエロゲマスターが！」」

「エロゲじゃない、ギャルゲーっす！」

「違う！前会長に没収されたのを忘れたか！」

「あれちゃんとクリアしたけど」

「...マジですか？」

「全部フラグ回収の上バッドエンドまで揃えたわ」

「さすがノンジャンルのオタク！」

「それが天草クオリティー」

「どんなクオリティーだ！」

「でなんの話でしたっけ」

「「忘れた」」

「まあいいんじゃないですか？作者の暴走ですからこれ」

「でもやった一で一頁埋める様な暴走じゃないわ」

「講談社に謝れ！」

「でも事実よ、これは文化部の暴走、講談社は文芸部の暴走、角川はSOS団の暴走」

「何とも言えない」

「しかも涼宮ハルヒの暴走にあのエンドレスエイトが入ってるって」

「何か作為感じますね」

「どうします帰ります？」

「まあもういいでしょ、どうせ次号でも私達呼び出されるのよ」

「でしょうね」

「ってことで今日の部活終了！」

「ネタですか！」

そんな感じで時は過ぎ去る。

続きがあるのか無いのかは想像にお任せし彼女らの話は一度終幕。

## 第一話

---

現在のマサラタウン。

「ミスト一朝だよ一起きろー」

「ああ・・・わかった 今起きる」

と・・・いつも会話をしながら、二度寝しようとするが・・・

「いたいたたたた・・・ごめん悪かったてゆるして」

「もう・・・私たちが見ていないとすぐ二度寝するんだから～」

ここらへんで自己紹介するか・・・俺はミスト・・・昨日15歳になったばかりの萌えモントレーナーだ！そして俺の目線の先にいるのはミニリュウのハクだ。

そして今下で料理しているのがヒトカゲのマグナだ。

そして・・・俺のベットで熟睡しているピカチュウのピカとフシギダネのミニスだ

この4人の萌えモンは俺の持ち手だ。

まあ・・・わけあって家にはもっといるんだが・・・

「え・・・いて・・・」

・・・ハクが何か言っているのでも他の萌えモンはあとで・・・

「ねえ～聞いている？」

「ああ・・・聞いているさ・・・」

そう言うとハクが笑顔で、

「それじゃあ・・・そこにいる二人を起こして、下にきてよ～」

「ああ・・・起きろ～朝だぞ～～お」

・・・あれ・・・全然起きないな～しょうがない無理やりつれてくか・・・

「よしよ・・・やっばかるいな～」といいながら、二人を肩にのせ、階段を下りる。

が・・・途中でミニスがおき、

「あれえ～何で私はあ～宙をういてるのかなあ～・・・ふああああ・・・」

「お・・・ミニス起きたか？もうちょいで下につくから待ってろ」

「おっけ～わかったよ～ん・・・ふあああああ・・・」

と・・・しゃべりながら、階段をおりて・・・リビングに入った瞬間、何かが抱きついてきた！！

そしてその何かをみると、小さいケンタロスだった。

・・・話は変わるが想像してみてください・・・いきなり萌えモンが自分に抱きついてきたら、嬉しいだろう・・・だがそれが何十人いたら、どうする？

・・・今の想像でわかっただろう・・・

今まで話していたことが・・・俺におきているのだと・・・

ケンタロスが抱きついたと思ったら、今度はイーブイ・カラカラなど色々な萌えモンたちが俺に抱きついてきた・・・体当たりなどをしながら・・・

「ぎゃあああああああああああああああああああああ」とは叫ばなかったが・・・てか叫べない・・・

萌えモンたちは俺のみぞおちなどの急所に抱きついてきて・・・声を出せない状態だった。

そして体当たりなどの技をやってあるので、威力が二倍・・・

(・・・何このダブルアタック・・・そして気を失いたいのになしなわなないこの痛み・・・どんな生き地獄ですかあああああ もうわかんないっ！ そしてこのかわいさなんですか？ 怒るにもおこれないじゃないすかっ！！ 逆になでながら、「えらいねえ～」とかやっちゃいそうじゃないですか！！！！！！)

と、心の中で主(作者)にツッコミながら、笑顔で・・・(こんな感じ→(\*°▽°)ノ)

「皆・・・元気がいいねえ～」と、言ってしまった。

後悔の念を抱きながら、

「皆でご飯食うか」

「うん！」

「ミスト はやくご飯たべよ～よ」

「ああ・・・てかなぜにピカが起きているんだ？そしてなぜ俺が座る前から座ってるんだ？」

「いや・・・おと一さんがあんな状態になってたら、普通起きるよ あとハクがたすけてくれた」

「あ～こりゃハクに礼を言わなきゃなんねえな～」

「ねえねえ、ミストオ～はやく食べなよ～ おかずなくなるよ？」

「それはやばい・・・はやくある程度のおかずは確保しなくては！！！」

朝ごはん食べ中。

ここでこの家に住んでいる人を紹介する・・・ 母さん まだ話の中では出でないが、性格は普通、容姿も普通のどこでもすんでそうな人だ・・・だが怒ると怖いらしい・・・(ガクガクブルブル) 次は萌えモンたち ケントロス・イーブイ・ポリゴン・ドードー・ガーディ・ズバット・ウツドン・マリル・ムウマ・ネイティ・ラルトス・ココドラ・チルット・フライゴン・ラクライ・ヒコザル・ポッチャマ・ブイゼル・リオルなどなど色々な種類の萌えモンがいるがこれは全部母さんと親父の萌えモンだ・・・そしてほとんどが小さい、そしてなぜかミストの方ばかり来る・・・親父と母さんとミストで暮らしてたときは、ほとんどの萌えモンがミストのところにきて、親父が落ち込んでたときもあったけらしい・・・最後は親父で、ミストの親父は・・・最強のトレーナーといわれ、萌えモン教授とも言われている・・・そして萌えモンの知識もすべて覚えており、スポーツ万能で萌えモンの技を受けてもびくともせず、性格も思いやりと優しさがあり、顔もイケメンで・・・ある意味弱点がなさそうな人だけど、母さんには頭があがらないらしい・・・そしてミストは、顔や体などは、親父に似て、性格は普通だが優しさもあり、萌えモンと人をひきつけられる感じがするがミストはそう思っていない、てか皆俺のことを過大評価しすぎだと思う・・・とミストは思っている・・・ おっと・・・朝ごはんが食べ終わりそうなので、いったん終わりにする。

「ふう・・・やっぱうまいな～マグナがつくったご飯は」

「ありがと～ そういってもらうと、私もうれしいよ」

と、世間話？みたいなことをしゃべっていたら

「ミスト～ちょっと話があるからきなさい」

と呼ばれた。俺は疑問を覚えながらも、

「おう・・・わかった」

といい、母さんのもとに行った。

「ミスト・・・何かやらかしたの？ オーキド博士があなたのこと呼んでいたわよ」

「・・・・・・・・・・はあ？・・・いや なんにもやっていないが、オーキド博士は俺のことを呼んでいたんだよな？」

「ええ・・・それじゃ呼んだ理由はなんでしょうね～ まあ 本人に会えば、わかることだからあってきなさい」

「おお・・・わかった それじゃちよいと支度してからいくか・・・」

といいながら、色々な萌えモンたちに邪魔されながらもリビングをでて行き、自分の服に着替えながら、道具などを取り出し、ボールもセットして着替え終わった。そして下に行き、ハクたちに声をかけ、ボールの中に入れてもらいながら外にでた。

「ふう やっぱ外の空気はいいな～」

といいながら、研究所に向かおうとしたら、「きゃ」という声がきこえたとおもったら、誰かにぶつかり、ぶつかった相手のほうが倒れてしまった・・・そして俺は「ごめん 大丈夫か？」と声をかけながら、手を伸ばした。

女の子はそれを素直に手をにぎり、「ありがとう」といいながら、立った・・・・・・・・

そして俺は、女の子の顔を見ながら、謝りたいとおもって、顔を見ようとしたら、知ってた顔が目の前にあった・・・そして女の子もきずいたらしく、「あっ」といい、いきなり

「ミスト、ちゃんと前みなさいよね！ 服が汚れちゃたじゃない！」と、言ったら、ムスっとして、横を向いた。こいつはシャルという名前の幼馴染だ。萌えモンはまだ持っていない新米トレーナーだ。

(はあ～・・・・・・・・またやっちゃったZE まあ・・・ここはあやまっておくか。)

「ごめんごめん 色々考えごとしてたから、前見てなくてさ～ ごめんな～シャル ゆるしてくれるか？」といいながら、頭をなでたら、ムーて感じの顔をして、

「わ、わかったわよ・・・ゆるしてあげるわ！！ だから頭を撫でるのはやめて！」

(お～ 怖い怖いてからかうのはやめにして、)

「おい・・・こっちに行くって事は、お前もオーキド博士によばれたのか？」

「あ～・・・・・・・・そうだけど・・・くっ・・・・・・・・あの変体め・・・今度はなにをさせるつもりかしら？」

今言った言葉はわかるけど、シャルはオーキド博士に何かやらされているのだろうか？と思いつつも、

「それじゃあ、一緒にいこうぜ！オーキド博士の話が何かよそうしながらさ！」

「え・・・ わ、わかったわ でも服の汚れをとってからいくわよ！」

といい、お尻をたたきながら、歩いていった。

「まってくれよ～」といいながら、シャルのところに走っていった。

その同時刻研究所では・・・

一人の男が、ポーとつたてていた。この男の名前はレット・・・シャルと同じく、ミストの幼馴染だ。まあ・・・レットは、それをみとめたくないらしい・・・

ここでマサラの住人を紹介する。オーキド博士・・・レットの爺さんで、すごく天才だが、萌えモンを愛してるとか言うので、「本当にコイツ、天才なのか？」と言われるほどのバカなのである。そして変人。次はレット・・・ミストの幼馴染で、自称のライバルである。だがレットは、自分の萌えモンを持っていないため、自力で萌えモンをとろうとし、モンスターボールを何十個もなげたが、捕まえられず、（萌えモンの技を食らっていたが、たっていて、不死身の男という名称をつけられた）泣いたと言う・・・そしてレットもオーキドの血を引いたのか、萌えモンのためには、死んでもかなわないといっている。

最後はシャル・・・さっきと同じく、ミストの幼馴染で、ライバルらしい・・・だが、ミストのことを好きで、まだ何も進展がないと言う・・・そして、レットと同じく、萌えモンを持っていなく、自分もほしいと思っていたらしい・・・  
おっと・・・誰かが来たようなので、いったん終わりにする・・・

レットは、誰かが来たようなので、振り向くとシャルとミストがいた。

「よっ・・・お前たちも、変態に呼ばれたのか？」

「おう・・・そして博士のところに行くときに、シャルを拾ったんだが・・・博士はいないみたいだな・・・」

「何をいっているんだい？君は・・・」

「はあ・・・いや博士「変態は死んだんだよ・・・」

「・・・ワオ・・・いきなり死亡フラグ、回収しちゃったよ・・・」

「ええ・・・あの変態死んだの？やった―――^-^-」

「変態・・・くっ」

「変態・・・変態の夢は俺が、実現して見せるぜ！！」

「夢・・・ってあれか・・・キュン☆萌えモンだらけのセーラー服帝国とかいうゆめか・・・」

「あれって完全に変態発言だね」

「ああそうだ！！だからその夢をかなえてやるぜ。キュン☆萌えモンだらけのスク水帝国を！！！」

「いや・・・名前完全に違うし、シャルが引いてるぞ・・・」

シャ（やばっ・・・やっぱあいつの血を引いていると、変態が生まれるんだね・・・）

「そんなにすきなのか？スク水が・・・」

「ああ・・・好きさ。大好きさ。愛していると言ってもいい！！！」

「ああ・・・断言しちゃったよ・・・この人・・・でも、思いはわかった」

「安心して眠ってくれ変態」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「で・・・この茶番いつまで続くの？」

「茶番とは失礼な！！ 人の死を茶番だとおおおお」

「いや・・・そこまで、叫ばなくても・・・そして、博士はしんでいないからな・・・萌えモンを追っかけて、崖から3300m落ちただけじゃないか・・・」

「いや・・・それは死ぬだろ・・・」

「まあ・・・死んでいないから、いいんじゃないか？ おれだって、そんぐらいの高さ、普通に飛び越えるぞ」

「いやいや、お前完全人外じゃん」

「まあ・・・それはいいとして・・・博士探すか？」

「簡単に流された！！！！ まあ・・・いや それと探さん！！」

「OK・・・シャルは？」

「いや・・・私は、ここで待っている」

「・・・探さないんだ・・・まあ・・・いや それじゃ、探してくる！」

そう言い、外に走っていった。

## 遭遇

---

ザー——— 突然の大雨が降ってきた。

「まずい、狩は中止して村に帰ろう。」 それというのもすぐそこは川なのだ、氾濫したら帰れなくなる。

「急がねば。」 そうつぶやいた時、川の大きな岩に何か引っかかっているのを見つけた。（おや？何だろう？）しかし、俺はその引っかかっている物が何かわかって大いに慌てた、それは人だったのだ。

俺は大急ぎで救出に向かった。・・・・・・・・

何だろう・・・このふわふわした感じ・・・ああ私死んだのかな？・・・でも、何か 見える あれは、 たくさんの人・・・ いや もう しんでるか・・・ ?・・・ あれは？ 死屍累々の屍の山の中一人だけ・・・そうたった一人だけまるで・・・私たちを・・・そう・・・かばうかの・・・ように・・・あの・・・人は・・・いったい？・・・・・・・・なぜ？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？・・・ここは？・・・どこ？目が覚めたとき、私は知らない部屋にいた。

知らない部屋。知らない壁。知らない天井。なぜか寝かされているベッドも布団もまったく記憶にない。

そんなことを考えていると、部屋の扉が開いた。「おお、気がついたか。」 そう言いながら一人の少年

が入ってきた。「ねえ、ここはどこ？どうして私はここにいるの？」 だいぶ意識がはっきりしてきた。

「ん？ここは、狩に生きる 名もなき狩猟民族の村だが。 覚えてないのか？まあ、質問できるくらいなら大丈夫か。

」「？ どういうこと？」 なんなんだかさっぱり分からない。

「あんたは、川に流されていて、運よく俺が見つけてつれてきた。 それだけだ。」「あっ」「思い出したらしいな

」「そうだった、私は足を滑らせて」「まあ、すさまじい雨だったからな。仕方ないさ。しかし驚いたぜ、川に人が流されて来ただけでも驚きなのにしかも女だったんだから。」

「そうだったのありがとう。そっそれから」「なんだ？」「えっとその私の服は？」「ああ、びしょ濡れだったからそ

こに干して・・・」「そっちじゃなくてっ！！」「え？」 彼女は赤面していた「その・・・誰が着替えさせてくれた

かよ！！もう、それくらいさっしてよ！！」「すまん、じゃ無くて、それはちゃんと村の女呼んでやってもらったから大丈夫だ。」「よかった～～～」「ところで、あんた名前は？いつまでもあんたじゃ俺が嫌なもんでね」「私は、カ

ナよ。あなたは？」「俺には名前など無い」「え？」

## 次号予告

---

次号「スクルンブル・マガジン vol.2」予告

・ 処女作掲載、齊藤大輔「《タイトル未定》」

創刊メンバーのひとりが著す「俺の妹」的小説。

・ 第二作、霧崎素哉「《タイトル未定》」

さらに悪化し何処へ向かうのか霧崎ワールド小説。

・ 冒険始動！、紅海一樹「ウイングス」

第一話は序章に過ぎない……。第二話で物語始動！

その他諸々でお届けします。

・ しかし予定は変わる可能性があります。